

軍隊生活とソ連抑留

静岡県 醍醐重雄

私は、航空機エンジン点火装置、高圧磁石発電機を製造する会社に勤めていたが、昭和十六（一九四一）年の徴兵検査で甲種合格、飛行兵として軍隊に入隊することとなった。会社は軍需工場で、重役は将官クラスの子備役の陸海軍人が名を連ねていて、青年学校校長は陸軍少尉で、教官は予備役の准尉であった。

十二月八日、徴兵検査を受けた社員二十数人は、午前五時、鍛練のため早朝訓練が行なわれた。途中、神社で休憩があり境内にさしかかったとき、ラジオ放送が聞こえてきて、日本海軍の真珠湾攻撃と、米英両国への宣戦布告を聞いた。以前より米国との間が緊迫していたので、いよいよやったか、相手がアメリカ・イギリスで手強いぞと感じたが、白人どもの横暴さを聞かされていたので、米英打倒の心で燃え立った。

明けて昭和十七年三月一日、入営で千葉県柏市郊外、豊四季にあった第四航空教育隊戸野中隊に入隊、エンジン関係の教育を受ける内務班に配属された。入隊間もない日曜日、「将官に敬礼」のラッパが鳴った。そして間もなく中隊の当番が飛んで来て、「お前に閣下が会いに来た、中隊長室にすぐ来い」と言われた。閣下と言われてピンと来て中隊長室に行くと、案の定、校長の陸軍少将であった。以前少将は飛行学校の校長で、中隊長は生徒であったとか、両者の間で話があり、会社が必要とする人間なので幹部候補生にさせず、三年で除隊させる約束がなされたと後になって知ったが、そのようなこととは露知らず教育訓練に従っていた。班内の者が次から次へ幹部候補生として出て行くのに、なぜ俺がと思っていた。この間、南方部隊への配属も続いた。しかし、私には声がかからず、教育隊の要員として残ることとなった。

しかし、北方アリューシャン列島、アッツ、キスカ両島の占領など北方情勢が緊迫し始めたためか、北方の空軍の増強作戦がとられ、教育隊の要員も転属命令

が下り、私は仲間十数人と樺太の飛行三戦隊に転属となった。教育隊の古参兵から、三戦隊は満州下番で、青森県八戸を経て樺太大谷飛行場に移った軽爆戦隊で「鬼の三戦隊、蛇の加古川、涙の階段血の廊下」と歌われており、ものすごく気合の入った部隊であると言われた。七月に転属のため一列車を編成、窓はシャッターを降ろし、外から見えないようにして北上した。途中、北海道岩見沢駅で、国防婦人会の方々に湯茶の接待を受けたことはありがたく忘れることにはできないひとこまとなった。

大谷飛行場は広大で、兵舎、格納庫も立派で強力な空軍基地である。私は、第三飛行戦隊第一飛行場大隊第一整備中隊第一内務班に配属された。班の古参兵達は、新しく配属された私達を「女学生」と呼び、配属翌日から強烈な教育が行なわれ、ほとんど毎日気合を入れられた。

部隊では休日でないのに課業を休む日が時折あったが、後で飛行機が墜落、乗員が死亡し、その慰霊祭のためであることが分かった。三戦隊は九九式双軽爆機

で墜落しやすい飛行機と噂されているとか、開隊記念日のデモフライトで九七重が離陸直後、隊内外の者の前で不時着し大騒ぎとなったことがあったが、なんと、乗員が始動が終われば燃料コックを飛行に切り換えるべきところを忘れ、燃料切れで落ちてしまったという、笑い話のような事故があった。

樺太の東海岸中ほどの知取シムベと言う小さな街の海岸に九九双軽が不時着して、その機の撤収作業に連れ出されたことがあった。街の人は、飛行機を近くで見ただけがないとのことで大勢の人が集まり、触ったり叩いたり、お祭りのようであった。

昭和十八年中ごろ、北海道苫小牧市外の沼ノ端という所に小規模の飛行場を設定することになり、数人の兵を連れて参加したことがあった。宿舎は王子製紙の集会場で、毎日、軍用車両の荷台に乗り、民間人（主として婦人達）への器材貸与のため三カ月ほど飛行場通いをして、完成式での行事として、九七重が帯広から飛来して来た。土地が砂地のため離陸の際、砂塵騰々、いやはや驚きの滑走路であった。参加部隊解

散、御苦勞さんとして、軍用車両一台の荷台に兵を乗せ、室蘭市までの旅行があった。樽の形をし噴煙を上げている樽前山を眺め、温泉で名高い登別、アイヌ部落の白老を過ぎ、室蘭市を高台から眺め、地球岬を見物。帰途、登別温泉第一滝本旅館の広大な浴場でホコリを落とし帰着した。このコースは平成五年九月、「再訪五十年の旅」と名付け、妻と二人でレンタカーを使って訪ね、王子製紙、登別第一滝本旅館、双方より記念の色紙の揮毫を受けて、現在室に掲げてある。

昭和十九年二月、北方作戦の展開で、千島列島に航空部隊を展開することになり、新たに独立整備中隊が編成されることになり、北海道帯広飛行場に移動した。新編成の整備中隊には、内地より航技兵が転属して来た。また、民間人の無線関係を扱う技術者も三人加わった。航技兵は飛行機製造会社の工員だった者達で、この者達の技術が島に展開したとき、機体の修理に大きな力となった。我々の中隊は第四独立整備中隊と命名され、噂では中千島に展開と言われていた。

二月中旬、北海道東部の釧路市と中標津町ナカシベツとの中間

くらいにある計根別飛行場ケネズに展開となり、私は兵五人を連れ先発隊となり、中隊到着の準備についた。だが間もなく帰隊命令が届き、帯広に帰隊したら、北海道より三番目の得撫島エヌマに展開と聞かされ、これでいよいよ戦死だなど覚悟を決めた。

三月十日、陸軍記念日に帯広を出て、乗船港小樽へ向かった。宿舎は松島屋といって旅館で、平成五（一九九三）年に訪れたときは休業中であつた。

一カ月はどたつて輸送船二隻が入港したが、一隻は一万数千トンの客船か、他の一隻は貨物船であつた。中隊の持っていた特殊車両は、旋盤・フライス盤・ボール盤などの他、雑工具類が相当数置かれた車で、貨物船のハッチに入らないので高島丸に積み込まれた。四月中旬ごろか、小樽港を出港した。積丹半島を回って青森県大湊軍港に着き、高島丸と私達二隻と駆逐艦二隻で船団を組み、ウルップ島目指して出帆した。

太平洋に出て船団は迷走作戦をとり、嵐の海域に入ったたりして幾日たったか、朝、海も凪ぎ、前方に島

影が見えてきた。飛行機も飛んできた。千島列島の太平洋岸は切り立っているため上陸はできず、オホーツク海側に上陸地点が点在する。海峡を通り島北端の上陸地点に到着したが、高島丸は見えなかった。飛行場は海岸より数十メートル上の台地で、揚陸作業は数日にわたり、かつ日没が遅いので長時間となり、疲労はひどかった。

数日後、高島丸が、エトロフ、ウルップの海峡で魚雷を受け沈没したとの噂が入ってきた。生存者はなく、島の西部海岸に多くの死体が打ち上げられ、地上部隊が出て収容しているとの情報が伝わり、高島丸が揚陸地点で見当たらなかった訳が納得できた。もし私が高島丸に機材監視で行かされていたらと、胸をなでおろすとともに、戦友達の冥福を祈った。

ウルップ島の飛行場は島の北端、「カラスの尾岬」と言う所にあつて、北よりの風が強く、霧が多く、滑走路は角材を並べての千二百メートルの飛行場で、堰体があちこちに散見している。

兵舎はもちろん三角兵舎で、湿気が多くカビが目立

つ。六月ごろになると色々な草花が一斉に咲き、黒ユリの集団は見事である。海岸では内地の二、三倍もある貝がゴロゴロあり、ウニは浅い海岸でたくさん採れ、アイナメの五、六十センチのものがウニを寄せ餌としてよく釣れ、自家製の塩を使い干物とし越冬糧料として貯蔵された。冬場、黒海苔が岩にたくさん着き、たちまち石油缶いっぱいもとれる。兵舎のストーブで醬油を入れ炊き上げれば、なかなかうまい味の海苔のつくただ煮が出来上がる。

ある日、帯広の飛行師団司令部の九七重が一機飛来してきたが、着陸態勢に入り降下中、風向きが逆転し、滑走路を飛び出し、機首を地面に、尾翼が上に、プロペラは曲がり止まったという事故が起きた。操縦士は無事であった。早速修理を命ぜられたが、肝心の修理用機材が沈んでしまっている状況では、修理に苦労した。しかし航技兵が活躍し、器材も入手してどうにか機体の修理も不十分ながら終わり、送られて来たエンジン、プロペラ等も装着され、試験飛行となった。操縦士は帯広から飛来してきた少年飛行兵出の中

尉である。修理責任者として私とエンジン担当の班長が同乗することとなった。高度千メートルほどになったとき、振動が生じた。エンジン担当の班長が左エンジン停止を指差した。プロペラ軸先端のカバーがなく、電線が風圧で揺れている。九七重のプロペラは電動式可変ピッチ方式で、英国ラチェ社考案のものである。操縦士が必死で機体の立て直しを図っている。中尉の上手な操縦で無事飛行場に到着、滑走路に着陸したが、そのときの機体の振動は恐ろしいほどであったが、これで命が助かったと強烈に感じた。直ちに事故調査が行なわれたが、多くの者が、片発だと墜落ものなのと言われた。これで死を免れたのが船のこととあわせ二度目だと思った。

北千島には時折米軍機が飛来してきたそうだが、ウルフ島には一度だけ飛来してきた。

飛行場周辺一帯は厚い霧に覆われていたため何もなかった。爆音は聞きなれぬものであったが、数時間後の飛来機は、米軍のコンソリテードットの飛行艇と連絡が入った。

戦況が切迫し始めたため、敵の上陸を想定しての演習があったが、銃は中隊に数えるほどしかないので、上陸となったら島の林の中へ「逃げの一手だね」と冗談を飛ばしていた。

週番に服務したとき通信分隊を訪ね、召集の班長と親しくなっていたため、情報を聞いていた。戦況が厳しくなってきた八月十日ごろ、日本向けアメリカ放送で、盛んに日本の無条件降伏を宣伝していると話を聞かされた。やがて八月十五日、玉音放送があるから軍装を改め舎前に集合との中隊長命令があり放送を聞いたが、良く聞き取れなかったため、多くの兵は終戦と分からなかった。通信の班長の話から、部下には負けたと告げてやったが、数時間して敗戦が知れ渡った。

敗戦になると支給品が時間गतつごとに種類、量が多く、処置に困り、戦友同士押しつけっこの有様であった。煙草は一人、三千本も支給された。見たことのない食糧品が山ほど出た。

八月三十一日朝、ソ連軍が上陸して来た。武器の撤収が始まった。兵器の手入れが悪いと日本軍人の恥に

なる、十分行えと命令が下った。指示された日に指定の場所に行つて見ると、銃、帯剣が山と積み上げられてあるのには複雑な気持ちになった。

上陸したソ連兵の兵舎内への侵入を警戒し、舎前にいたときソ連兵が銃剣の先でピンを描き、腰の水筒（ガラス瓶）の栓を抜き、臭いをかがせた。何とアルコールの臭いでびっくりした。情報では、飛行場に積んであったエンジン始動用のメチルアルコールを見つければ、何人か死亡したようであると聞かされた。

しばらくしてソ連船が入り乗船した。船倉に押し込められ、甲板には自動小銃（マンドリン）を持った兵が立って警戒していた。ソ連軍が上陸して来て感じたことは、皆、自動小銃で、日本のような単発式ではないのには驚き、日本軍の装備の旧式さにはうらめしく思った。

船はウルップ島を離れ、ソ連兵はしきりと「カッカイドウ」と口走っていた。やがて見覚えのある港に入った。樺太の大泊港である。船に大釜、大鍋などが積み込まれ出港した。夜トイレのため甲板に出て星空

を見たら、北極星に向かって進んでいるので、ソ連兵が言っている北海道でなく北方方面で、容易ならぬことになると思った。

一、二日航海したか、軍艦が浮かんでいる港に入った。直ちに貨車に詰め込まれ、間もなく走り出した。列車はよく止まり、行ったり戻ったりしたのは理解できなかつた。

途中、駅で停止していると子供達が物をねだるので、故郷へ持ち帰ろうとしていた品物の一部を放り与えたが、負けた国の人間が勝った国の人間に物を与えるなんておかしな話で、ソ連も戦争で生活物資がなかつたのであろうと思つて複雑な心境であつた。

やがて鉄道沿いの収容所に入れられたが、丸太作りの二十メートルを越すほどの建物で、二千人ほどは十分生活できるような規模であり、周囲は有刺鉄線が張りめぐらされ、監視塔が四隅にあり、ソ連兵が四六時中、監視していた。宿舎内は暗く、手製の石油ランプの明かりが頼り。一番の困りごとは、寝床、丸太の壁、天井から来襲してくる南京虫で、これにはホトホ

ト参った。

朝の作業への出発がこれまた大変。収容所側と受ける側との人員確認が門の入り口であり、双方数人が立会い、ロシア語でパビアチ、パビアチと大声と銃でおどしたりする。パビアチは五列というロシア語で、五列に並べという意味であることがすぐ分かった。列をつくっても出入りが生じるので、双方の数字が合わないと再度やり直し、双方合うまで続けられるから、どうしても二千人ほどの出発までには数十分かかり、怒号も混じり、出門のときは大変な騒ぎである。

我々の作業は鉄道線路の修正、線路周辺の拡大のための伐採、川岸までの幅の拡大のための土手構築、小河川の架橋補強などが主で、冬期は材木伐採である。降り積もった山道を二、三時間かけ上り、四、五メートル積もった雪の中、伐採にかかるのが十一時ごろ、二人引きの鋸(のこぎ)(ピラー)で切り倒すが、ソ連人の監督が回って来て、積もっている雪を掘って下から切り倒せとやかましい。しかし、腹はペコペコで雪を掘る気力、体力はない。見せかけに雪を少し掘り切り

倒す。夏になって山を見ると、あちこちのところで敵メートルくらいのところまで切られている林が見え、戦友と顔を見合わせニヤニヤである。

入ッして間もないときのことであるが、ソ連人がほとんどそうであったが、日本兵の腕時計に異常なほどの関心を示した。ソ連人の中には腕に時計の入れ墨をしている者を何人か見た。もちろん腕時計を持っている兵、民間人を見たことがない。監視役のソ連兵が部下の腕時計を「見せてくれ」と外させ、奪って離れて行った。部下は返してくれと追いかけたが返さない。

そこで私は「この泥棒野郎め」と叫んで追いかけた。ソ連兵はクルリと振り返り、マンドリンを構え数発発射した。弾は体をかすめる音をさせて飛んでいった。中隊長から帰れと声をかけられ、後ずさりして戻った。千島への航海のことと、九七重のテスト飛行のこと、そしてこのことで三度死に向かったが、その都度死を免れた。人間の生死は運、不運と言われるけれど、この先何が起きるか、一寸先はまさに闇である。

我々は沿海州にいるらしく感じ取っていたが、春に

なるとツツジが広範囲に咲くらしく、列車（主として貨物）の機関車はツツジの花で満飾、綺麗で見事である。日本人が飾りつけたのであろうと話合った。

夏になると落雷があちこちであり、山火事を起す。夜になると周囲の遠い山々や、近くの山も一面火が見えて、それは見事な美しさである。昼間はあちこちで細い煙を上げていて、夜の火の海は想像できない。伐採で山に入ると木材の焼けこげをときどき見かけたことがあり、山火事の跡であったのだろうと思つた。

ソ連人は全体的に教育水準が低く、簡単な計算はできない人が多いようである。たまたま川岸の護岸とダム工事をやらされたが、ダムを河岸より数メートルせり出す工事では、最初川の中に岩石を落とし込み、次第に高くしていく訳であるが、初めは落とし込む岩石が中々姿を現さない。作業量は計算の仕様がなない。そこでノルマは最低で、食事は最低となる。しかし、日がたつにつれ岩石が頭を出してくると積み上げた高さと同距離で体積が計算され、作業能率が計算され、そ

れにより食事が決まってくる。そこで頭を使い、積み上げる岩石の隙間に投げ入れる土、砂、小石等は積み上げ高さを増す助けにならないので、岩石の上に木の枝、ムシロ、草などを敷き、見つからないよう大急ぎで運搬のターチカ（一輪車の運び車）を動かして、知らん顔してその上に新たな岩石を積んでいき、ソ連人の監督の目をかすめて土手を築き上げた。ダムは台形の土手であったが、毎日の作業量の報告には台形の面積計算の数式には二で割るが、それをせず監督に提出し、能率を倍増させ、数日、食事を増加させることに成功した。我々の班が突然食事が多くなつたのを他班の者が訳を聞き出し、やつかんで監督に言いつけた奴がいた。同じ境遇の日本人同士である。おかげでバレー監督から Cholmar（監獄）だとおどかされ、計算式の記憶違いだと平身低頭、やつと許されたが、計算係から外された。他隊に迷惑をかけたではなし、食い物の恨みは恐ろしいものだ仲間と話合った。

川岸埋立工事のイカサマはばれず、一冬越して春先の雪解けのとき、上流から流れてくる大きな氷塊の一撃

で跡かたもなく消え去ってしまった。

秋口になって体調をくずし発熱した。三十七度以上ないと作業に行かねばならない。診断の結果、入院となり病院に送られた。医者は女軍医が多い。独ソ戦で独軍に捕まったが、その後ソ連軍に解放されて、懲罰としてシベリアに送られて来たとの話をしていたが、真実は不明である。診断の結果、独立した病棟に入れたが、二十人ほど二段ベッドで寝ていた。結核、しかも重症病棟と聞かされた。三カ月ほどいたが発熱することなく、軽症病棟三カ月を経て一般病棟に移った。そこに移ってから三十七度以上の発熱が続いたが、別に気にとめていなかった。ロシア語が少し分かるというところで看護婦の手伝いをさせられ、日本の軍医さんの手伝いもし始めた。色々な病人と知り合い、病気の種類の多さに驚いた。ある日、若い補助看護婦がアイロンをかけていたが、患者達の前で炭を入れたアイロンを見せて、日本にあるかと自慢げに言った。患者達は「ない」と言ったらどうだと言わんばかり。そこで、「今はないが百年前まであった、今は日本中

どこでも電気で、アイロンはもちろん、炊事、洗濯はすべて電気。汽車はなくなり電車が走り、エレベーターで上下し、電灯が昼夜明るくつき、すべて電気である」など、嘘八百を並べたて目を白黒させた。病棟内は軽症者が多かったので比較的明るかった。

病棟内でも二段式ベッドの隅に南京虫がいて、時折日光に当て何やら吹き付けていたが、いなくなることはなかった。

二十二年夏も過ぎ、ダモイ話が何回か出たが、何か動きが変で、軍医さんに聞いたところ、本当らしいと分かり、あとは誰が帰れるかで盛り上がって行った。病院では患者間で絶えず食い物の話がよく出て、ポタ餅とおはぎの違いとか、関東で言う納豆は関西では甘納豆を指すから、辛子を入れ醤油を差しごはんにかけて云々と言ったら、びっくり顔、双方やっとなんか大笑いなどなど、毎日病床では食物の話で持ちきりであった。

いよいよダモイとなったが、病気がりて持ち物はこれといっとなし、手ブラで汽車に乗りナホトカに到

着、日本からの引揚船待ちとなった。ナホトカ港の船つき場で海中をのぞいてみたら、二十センチくらいの魚や貝類が多く見られ、沿海州は良漁場のはずと話し合ったり、余裕が出てきた。

待ちに待っていた帰還船がつき、船上で思わず仲間達とパンザイを叫んだ。舞鶴港に近づき日本の風景、松と木々の青さを目にしたとき、よくぞ死なずに帰れたものだと思いがにじんだ。

帰国後三年ほどたつて体の異常で入院、結核性泌尿器系病氣と診断され手術を受けたが、シベリアで重症病棟に入れられ、そこで結核菌がうつり発病したのである。

シベリアの病院で世話になった軍医さんが青森県八戸市の方と教えてもらっていたので、平成五年五月、在ソ中の御礼を申し上げにお伺いしたら、既に亡くなっておられ、残念であった。御夫人に御礼を申し上げ、霊前にぬかづき御礼を念じ焼香し、仏前を辞した。

回顧

静岡県 松崎 市郎

大正後半の生まれはまだまだ青年だなどと、揶揄ともとれる言葉をつい最近まで聞いたが、光陰矢の如しと「齡」喜寿となり、震災子であります。お袋が、梁の下敷きになろうとしていたとき覆いかぶさってくれて私は難を免れたとか。

昭和七年（一九三二）一月、上海事変勃発。私の伯父は当時、高崎歩兵第十五連隊より出征（私の母は群馬県出身）。父親（埼玉県出身）と、沼津駅まで見送りに行った記憶がある。その伯父も事変拡大と共に戦死の報を受ける。

昭和八年十二月、皇太子殿下（今上陛下）御誕生、祝砲が揚がる。

昭和十年三月 大岡尋常高等小学校六年卒業

四月 静岡県立沼津商業学校入学